

北社会ニュース 第13号

2005-6-15

発行：鈴木壮夫

本日は会員によるスピーチ第2回目です。(1) 会員同士がお互いをより知り合い、(2) 仕事・生活・大袈裟ですが人生の「糧」を掴み(3) 同窓という「連帯感」で生き抜くことを目的として始めました。本日のお二人の講師—白崎敬治氏・伊藤悦敬氏—とは北社会で同席してもう何年になるでしょうか。

白崎さんとは昨年末、曾根さんのお通夜のお清めの場で初めて英国留学そして日本人二人目の国際的建築資格取得者だということを知りました。伊藤さんの「言語交流研究所」が川越市内でよく見かけるピラ「7ヶ国語で話そう」を支えておられることを知ったのは先月の北社会でした。「宝の持ち腐れ」にならぬよう、今後も会員各位のご協力をお願い致します。自薦他薦は世話人にどうぞ！今秋第3回目を予定しております。

来月以降の講演予定

7月20日(水) 麻喜宏雄氏(高9回) —昭和31年度応援団長—

高9回生は昭和20年4月戦時下の国民学校入学、8月には敗戦。戦後生き抜き二高時代には今ではもう昔話になった甲子園出場という「夏物語」がテーマです。

8月17日(水) 田村精誠氏(高25回) —若手起業家—

高度消費社会において、消費者の「欲しい」を探求し、消費の活性化を目指し、新しいマーケティング手法で来るべき新しい社会に貢献していく、これがテーマです。

1960年6月15日・国会南通用門

45年前も蒸し暑い日だった。安保改定阻止国民会議全国統一行動が展開され、この日のデモには全国各地で実に580万人が参加した。世間では「ナンバ」の慶応でも平和路線に急転換した代々木系全学連反主流派のデモに数千人が参加していた。それに引き替え、慶応では僅か数十人程度の精鋭(?)だけが全学連主流派に属していた。母校の補習科時代から主流派のデモに参加したいと熱望し、入学すると必修科目の授業だけは優先させたが日吉の学食で40円のカレーを喰って連日国会周辺に通い、主流派のデモに参加していた。主流派のデモに慶応が—数十人でも—加わっているのが珍しいことだったらしく、銀座四丁目交差点での「渦巻きデモ」をやる「三色旗」が朝日新聞の社会面に掲載されたこともあった。クラスの討論会の都度、よくもめた。当時から「ONLY ONE」だったのかもしれない。英文和訳の「仙台弁」にクラスが笑った。小泉首相は一年後輩だがあの「やから・輩」を想像していただければ当時のクラスの雰囲気は少しは理解していただけたと思う。気持を強く張り詰める出来事が生じた。5月19日、自民党は新安保条約を単独で強行可決した。民主主義を踏み躪る行為と非難され、「岸を倒せ！」が全国運動に拡がった。強行可決の時、当時の衆院議長清瀬一郎氏を抱きかかえ、議長席に運び、混乱に拍車をかけたのが私のオヤジの築館高の後輩「長谷川峻」議員—宮城2区—だった。仙台に用事がある度にオヤジを訪ねていただいた。だから挨拶程度の面識はあった。自民党内での自分の存在価値を高めるためやったことかもしれないが私は許せなかった。国会は空転状態となり、このままいけば一ヶ月後、つまり6月19日、新安保条約は自然成立される。「なんとかせねば」と誰もが思いこの日—6月15日—主流派は国会正門前に集結していた。

午後2時頃だったと記憶しているが私達の責任者がやや緊張した顔付きで中執から戻ってきた。日頃とは雰囲気が違う。緊張感が感じられた。周囲を気配りして低い声で

「今夕、国会突入の指令がでた。注意して行動するように。口外するな」と告げられた。それまで渋谷や新橋等でのピラ配りの折り、私服のデカに狙われ、何となく「雰囲気」は体得していた。スクラムを組んで国会周辺をデモった。当時、ゲバルトが強いと評判だったのは明大/和泉と東大/駒場だった。擦れ違った時、彼等の士気は高かった。

午後5時頃、南通用門に集結、先ず阻止車両を引きずり出した。騒然とした戦場だった。針金を切断した大型のベンチ、車両に結びつけた太い縄以外は何も持たなかった。車両が外に出た瞬間隙間をぬって国会に入った。突入ではなく、最初は「御免下さい」だった。しかしそれは一瞬、洪水のように学生達が高举して、塊となって突入した。すぐギョッと締め付けられた。警視庁機動隊が先頭の学生に棍棒を滅多打ちして、バタバタと倒されそれを知らぬ学生が塊となって突入してきた。私は15列目位にいた。前後の圧迫で初めて「死ぬかもしれない」と思った。背が低いので引き倒され、踏み付けられる恐怖に、やっとの思いで、爪先立ち、倒れないようにこらえた。履いていたビニール製の靴のゴム帯が伸びきって元に戻らなかった。機動隊に排撃され、やっとの思いで通用門から外に出た。放水でずぶ濡れだった。甲高い声が続く。「7-8人が殺された」「右翼が新劇人のデモ隊に襲いかかり相当数の怪我人が出た」。体制を立直し再度突入を図った。門柱によじ登り「撒」を飛ばそうとしたが、コドモの出る幕ではなかった。

催涙ガスを避けて、早朝一番電車で大田区の下宿に戻り、必修科目を受けて、又国会に戻った。前日の全学連主流派の国会突入は「右翼が新劇人のデモ隊にトラックを暴走させて60-80人が負傷、怒った全学連が国会突入を図った」と各メディアは報道して、東大生・榉美智子さんの死亡を告げていた。「国会突入を図る」という全学連の指令は一切報道されなかった。加害者である全学連がむしろ被害者であるかのような報道が続いた。

「榉美智子」さんの清楚な美しさも国民感情を味方にしてくれた。

私は結果として初めて「報道現場」に当事者として動き回っていた。それまでも少々「報道の軸」には疑問を抱いていた。6月15日は報道の何たるかを実感させられた日でもあり、精神的に「オトナ」になった日かもしれない。私はジャーナリストを志望してそれなりに努力していた。卒業を控え、メディアに挑んだ。先ず筆記試験はほぼ百点満点が条件だった。今でも忘れられない。毎日新聞では「未必の故意」、中央公論社では「芥川賞・第1回受賞作家と作品」という問題に答えられなかった。原点の日なのです。

毎日新聞・6月6日

男女共学論争

東北・宮城県を舞台に「激論」が続いている。と言っても、あの球団の戦力アップ問題ではない。県立高校の男女共学化をめぐる議論だ。

宮城は伝統校を中心に、県立高に男女別学が多い。これを重くみたのが浅野史郎知事。自ら母校、仙台三高の共学化を率先して決断したのだが、同窓会が「100年の伝統を破るのか」と猛反発。今春、県議会で慎重派の請願が採択され、06年春の実施が1年、延期される事態となった。

この男女別学、宮城、福島、群馬、栃木、埼玉などで多くの県立高が戦後も維持してきた。

ところが最近、福島で急速に見直しが進み、県立高すべてが共学化する「異変」が起きた。他県も見直しへ背中を押されているが、旧制中学を前身とするような伝統校ほど、抵抗感は強い。

「(母校の)別学は文化であり伝統。一律共学化にメリットはない。1年延ばしても納得できない」とは、仙台二高同窓会の高橋正道副会長(72)。「別学地域文化論」を生徒はどう、受け止めているのだろうか。

【入羅格】

6/6
毎日